

【FD 報告】

税法修士論文完成に影響を与える要因の検討

—重回帰分析を用いた量的アプローチから—

望月 拓実

I. 緒言

1980年代から増加傾向にある社会人修士学生は、近年においてもその人気を維持しているといえる(堀籠, 2016)。しかし、その実態として働きながら修士号を取得する忙しさが90年代から指摘されており(沖津, 1996; 柳田, 1997)、なかには「仕事と両立させるには睡眠時間を削るしかない状況」(高橋ら, 2015, p. 23)という意見もみられる。ゆえに、仕事との両立を行いつつ修士論文完成を目指す社会人修士学生は、大学院に効率的

かつ質の高いカリキュラムを求めていると推測される。

例えば、本学においてはマイルストーン管理による修士論文完成までの道筋を明確にする方式が用いられている(図-1)。また、並行して学術的文章作成能力を向上させるアカデミック・ライティングプログラムを実施しており、効率的かつ質の高いカリキュラム構成を提案している(表-1)。しかし、上述した二つのカリキュラムは、まだ検討すべき課題が残っていると考えられる。

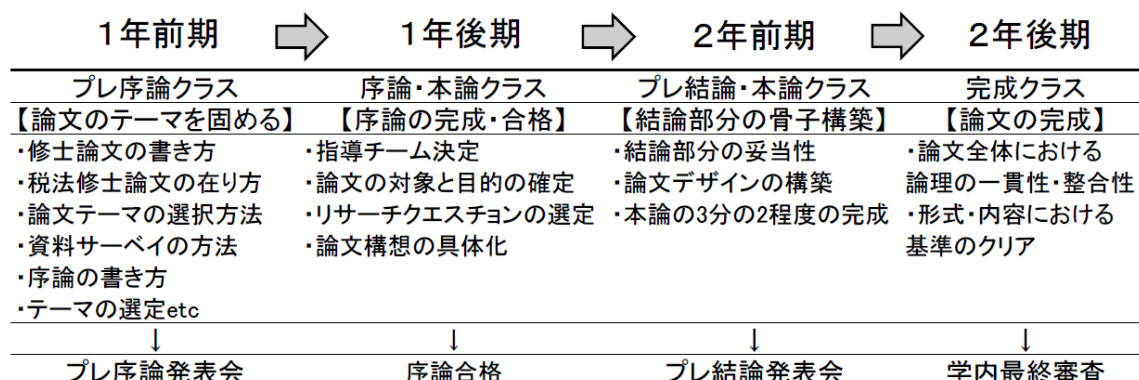


図-1 マイルストーン管理概要

表-1 アカデミック・ライティング概要

プレ序論クラス 基礎編	序論・本論クラス 発展編
・助詞の使い方 ・主語と述語の整合性 ・受動態・能動態 ・一文一義 ・参考文献表記法 参考文献リストの作成	・キーワード引用 ・ブロック引用 ・1行まとめ ・3行まとめ ・学習のまとめ

第一の課題として、マイルストーン管理方式が実際に効率的かどうか検討されていない点が挙げられる。マイルストーン管理方式の具体的内容に

ついては過去に報告書形式で整理されている(山本, 2011; 2012)。しかし、学期ごとの明確な目標を示すというマイルストーン管理方式が実際の修

士論文完成にどのような影響を与えているかはまだ検討がなされておらず、正確な効果は測定されていないといえる。教育学の世界において、義務教育課程や高等学校におけるカリキュラムの効果測定などは充実した研究蓄積があるといえる。そして、学士課程におけるカリキュラムの効果測定も一定の研究蓄積があるものの、修士課程や博士課程においては研究蓄積が少ないと予想される。また、修士課程や博士課程における論文指導方法の研究では、「書き方」や「留意点」といった指摘に留まっており(岡部, 2012)、カリキュラムに対する言及はほとんど行われていないといえる。つまり、本学に限らず、修士課程におけるカリキュラムが修士論文完成にどのような影響を与えているかはあまり検討されていない実態がうかがえる。

第二の課題として、アカデミック・ライティングプログラムが実際に効率的かどうか検討されていない点が挙げられる。本学においては、初年度に全 10 回のアカデミック・ライティングプログラムを設けており、基本となる助詞の使い方から修士論文作成に直結する引用方法など学術的文章作成能力を向上させるプログラムを実施している。しかし、これらプログラムをカリキュラムに取り入れた結果、実際の修士論文完成にどのような影響を与えているかはまだ検討されていない。中央教育審議会(2012)は、学士課程教育における社会および学生からの不満があると述べており、半数近い学生が「論理的に文章を書く力」などに関する講義の有効性を実感していないと指摘している。アカデミック・ライティングを始めとした文章作成能力が重要視されている(堀ら, 2016 など)現在において、学生側からみて有効性を実感していない現状は問題といえる。修士論文・博士論文の完成を主たる目的とした修士課程・博士課程においてはより重要と言えるであろう。特に、一般的な大学院と比較し、限られた時間内で修士論文を完成させる必要がある本学において、文章作成能力を伸長させるアカデミック・ライティングが有効であるかどうかは極めて重要と推察される。

アカデミック・ライティングに関する近年の研究動向を概観すると、アカデミック・ライティングの実践報告(要ら, 2011;宮崎, 2013;トンプソン, 2016 など)が中心となっている。その他の研究としてアカデミック・ライティング導入効果の研究(中谷, 2015;渡邊, 2015;薄井, 2015 など)

やアカデミック・ライティング指導法(中東ら, 2016)、アカデミック・ライティング評価からみる改善案(武谷ら, 2015)など多岐にわたる。しかし、前述したように一般的な大学院と比較して学習時間が限られている本学においては、アカデミック・ライティングをはじめとした講義・学習が修士論文完成に対してどれほど有効であるかが重要といえる。さきに示したアカデミック・ライティングに関する先行研究では、具体的な学習内容が議論されているものの、論文完成に対してどれほど有効であるかは検討されていない。

前述した二つの課題から、本学における「マイルストーン管理方式」「アカデミック・ライティング」などのカリキュラムをはじめ、何が修士論文完成に影響しているか検討することは「限られた時間で修士論文を完成させる必要がある社会人学生」への実践的価値と「修士課程以降に実施されるカリキュラムの有効性を分析する」学術的価値があると推察される。

以上の背景をふまえ、本研究の目的は、税法修士論文完成に影響を与える要因を明らかにし、カリキュラムの有効性を提示することである。

II. 研究方法

1. 測定項目の検討

測定項目として、まず「マイルストーン管理方式」の有効性を測定するために、出席状況及び修士論文ファイル提出状況が把握できるデータが必要と考えられる。同様に、「アカデミック・ライティングプログラム」の有効性を測定するため、プレ序論クラス及び序論・本論クラスにおけるアカデミック・ライティングプログラムの取組状況を数値化したデータが必要と考えられる。以上二つの有効性を測る項目として、本研究では「プレ序論クラス出席回数」「序論・本論クラス出席回数」「序論・本論クラス提出回数」「プレ結論・本論クラス出席回数」「プレ結論・本論クラス提出回数」「完成クラス出席回数」「完成クラス提出回数」「アカデミック・ライティング合計点数」を用いることとした。なお、「アカデミック・ライティング合計得点」は、全 10 回の講義すべてが満点だった場合を 100 点と換算し、データの処理を行った。また、これら測定項目に加え税法修士論文完成時

期に影響を与えると予想される「税理士科目取得数」も測定項目に追加した。

続いて、成果変数としての測定項目を検討する。本研究における成果は、税法修士論文の完成である。また、「完成」も第一回提出・第二回提出・第三回提出と提出時期に差があることに加え、延長提出や延長中など提出状況はサンプルによって大きく異なる。よって本研究では第一回提出を「5」と便宜的に設定し、第二回・第三回と提出時期が遅くなるにつれて数値を下げる処理を行った。

2. 調査対象の選定

本調査では、測定項目すべてをデータとして取得できるサンプルが調査対象となる。ゆえに、今回は 2014 年度前期入学者から 2015 年前期入学者までの 60 名が調査対象となった。

3. 分析方法

分析方法として、「修士論文合格時期」を従属変

数として設定し「プレ序論クラス出席回数」「序論・本論クラス出席回数」「序論・本論クラス提出回数」「プレ結論・本論クラス出席回数」「プレ結論・本論クラス提出回数」「完成クラス出席回数」「完成クラス提出回数」「アカデミック・ライティング合計点数」「税理士科目取得数」を独立変数として設定する重回帰分析を用いることとした。なお、分析ソフトは spss ver. 21 を使用した。

III. 結果と考察

1. 税法修士論文完成に影響を与える要因の検討

分析方法で示した測定項目に従い、強制投入法による重回帰分析を行った。重決定係数は、.487 であり、0.1%水準で有意な値であった。それぞれの独立変数から従属変数への標準化係数は表-2 に示す通りである。

表-2 重回帰分析結果

	標準化係数
プレ序論出席	-0.131
序論・本論出席	0.148
序論・本論提出	0.261
プレ結論出席	-0.24
プレ結論提出	0.478 *
完成出席	0.468 *
完成提出	-0.618 ***
アカデミックライティング	0.007
税理士科目	0.089

*:p>.05 ***:p>.001

分析の結果、「序論・本論出席」「序論・本論提出」「プレ結論・本論提出」「完成出席」「アカデミック・ライティング」「税理士科目」が正の関係を示す値となった。一方で、「プレ序論出席」「プレ結論・本論出席」「完成提出」が負の関係を示す値となった。また、「プレ結論・本論提出」「完成出席」は 5%水準で有意な値を示し、「完成提出」は 0.1%水準で有意な値を示した。以下、この分析結果に対する考察を行う。

2. 影響要因から考えられる示唆

第一の考察点として、「完成提出」が負の関係を示しており、かつ 0.1%水準で有意な値となった原因として、提出時期との関係が考えられる。本

学では完成クラスに入り早期の段階で論文が完成した場合、第一回目で論文を提出することとなる。ゆえに、早期に論文を提出した学生は自然と完成クラス後半では論文ファイルの提出を行わない傾向があると推察される。つまり、第一回提出時期や第二回提出時期に論文を提出した学生ほど完成クラスにおけるファイル提出回数は少なくなると予想される。よって、分析結果として問題はないといえる。

第二の考察点として、本来であれば正の関係を示すと考えられる「プレ序論出席」「プレ結論・本論出席」が負の関係を示している点が挙げられる。この結果について、重回帰分析の数値だけでは解釈が困難であると判断し、論文提出時期ごとにお

ける各独立変数の平均値を一覧にし、考察を行った(表-3)。

表-3 従属変数の平均値一覧(提出時期別)

合格時期		プレ序論出席	序論・本論出席	序論・本論提出	プレ結論出席	プレ結論提出	完成出席	完成提出	アカデミックライティング	税理士科目
延長中	MEAN	12.27	10.45	7.91	9.91	8.36	10.9	10.5	4	1.18
	n	11	11	11	11	11	10	10	11	11
	SD	2.53	4.37	4.89	4.13	4.32	4.25	4.74	3.71	1.33
延長提出	MEAN	14	12.57	9	12.43	8.71	12.14	12.29	4.14	0.43
	n	7	7	7	7	7	7	7	7	7
	SD	0.82	1.72	3.00	1.72	2.21	2.41	3.25	4.06	0.79
3回目提出	MEAN	13.62	14.23	12.15	14.15	12.31	14.15	14.00	6.62	1.08
	n	13	13	13	13	13	13	13	13	13
	SD	3.55	0.73	2.58	0.99	1.18	1.14	1.68	3.50	1.26
2回目提出	MEAN	14.1	14.05	11.9	14.05	12.25	14.6	12.5	6.2	1.5
	n	20	20	20	20	20	20	20	20	20
	SD	1.77	1.47	2.94	1.67	1.48	0.68	1.67	3.41	1.50
1回目提出	MEAN	13.44	13.89	11.44	13.56	11.44	13.33	9.89	5.67	1.89
	n	9	9	9	9	9	9	9	9	9
	SD	1.59	0.93	3.28	1.24	1.33	1.87	3.22	3.04	1.54
合計	MEAN	13.55	13.23	10.82	13.05	11.02	13.39	12.07	5.57	1.28
	n	60	60	60	60	60	59	59	60	60
	SD	2.35	2.54	3.66	2.65	2.78	2.49	3.10	3.55	1.38

まず、「プレ序論出席」「プレ結論・本論出席」の列に着目する。「プレ序論出席」における「延長提出」「延長中」の平均値を確認すると、14及び12.27となっており1回目～3回目提出と比較してほとんど変わらないことがわかる。「プレ結論・本論出席」においても、「延長中」が9.91と低い値を示しているものの、「延長提出」が12.43と比較的高い値を示していることがわかる。この結果から「延長提出」や「延長中」となる学生であっても、年度の始めには出席しているといえる。しかし、ファイル提出の数値は期限内に提出する学生と比較し大幅に低いことから「出席はしているものの、論文作成自体は進捗していない」実態が推測される。そして、「序論・本論クラス」「完成クラス」という論文の核を構成する時期や論文全体を完成させる時期に出席・ファイル提出を行っていないことから期限内に論文が完成していないと推測される。以上、第二の考察点から「ただ出席するだけでなく、毎回ファイル提出をすることが論文完成に近づく」ということが示唆として考えられる。

第三の考察点として、「アカデミック・ライティング」が修士論文完成にあまり影響していない点が挙げられる。「アカデミック・ライティング」は本学が掲げる学習方法の一翼を担っており、修士論文を書く上では極めて重要な学習と考えられる。よって「アカデミック・ライティング」がどのように修士論文完成に影響しているかを平均値一覧(表-3)から考察する。

「アカデミック・ライティング」の平均値をみると、第一回提出者の平均が5.67という値を示し

ている。一方で、第二回提出者の平均が6.2であり、第三回提出者の平均が6.62と第一回提出者よりも高い値を示している。ただし、延長提出者の平均が4.14であり、延長中の学生の平均点も4となっており期限内提出者よりも大幅に低い平均値となっていることもわかる。この結果から読み取れる示唆として、「期限内における提出時期にアカデミック・ライティングはあまり影響しない。しかし、期限内に修士論文を提出するためにはアカデミック・ライティングに取り組むべき」ということが考えられる。

第四の考察点として、「税理士科目」取得数が修士論文完成時期にあまり影響していない点が挙げられる。「税理士科目」も、税法修士論文を記載する上で必要となる前提知識をどれほど有しているか判断する上で重要といえる。よって、「税理士科目」取得数がどのように修士論文完成に影響しているかを平均値一覧(表-3)から考察する。

「税理士科目」の平均値をみると、第三回提出者の平均値が1.08であるのに対し延長中の学生の平均値は1.18と第三回提出者よりも高い値を示している。当然第一回提出者や第二回提出者の平均値は1.5以上と高い値を示しているものの、延長中の学生の方が税理士科目を取得している場合もあることがわかる。この結果から読み取れる示唆として「税理士科目は多く取得しているに越したことはない。しかし、必ずしも税理士科目を取得していたほうが早く修士論文を完成できるわけではない」ということが考えられる。

IV. 結論

本研究の目的は、税法修士論文完成に影響を与える要因を明らかにし、カリキュラムの有効性を提示することであった。当該目的に対する結論は、以下のとおりである。

1. 税法修士論文完成に対して、「序論・本論クラス出席回数」「序論・本論クラス提出回数」「プレ結論・本論クラス提出回数」「完成クラス出席回数」「アカデミック・ライティング合計得点」「税理士科目取得数」が正の影響を与える
2. 期限内に修士論文を完成させるためには、ただ出席するだけでなく毎回のファイル提出が重要である
3. 期限内に修士論文を完成させるためには、アカデミック・ライティングに積極的に取り組むことが重要である
4. 税理士科目は多く取得しているに越したことはないが、多く取得しているからといって期限内に修士論文が完成するわけではない

以上4つの結論を受けて、本研究から示唆できる学術的価値と実践的価値（学習への取り組み）を提示する。

学術的価値として、これまであまり実施されなかった量的アプローチによる分析から一定の傾向が読み取れる可能性を示唆した。本研究では「出席回数」や「提出回数」という質的データと比較すると情報量が少ない測定項目を用いて分析を行っている。しかし、結論に示したようなカリキュラムの有効性や修了延長してしまう学生は必ずしも税法知識が少ないわけではないといった知見を見出すことができた。量的アプローチによる「傾向」をふまえ、質的研究を行う際のサンプルを選定するといった発展研究への足がかりとして一定の価値があると推測される。

次に、実践的価値を提示する。本研究で得られた知見及び筆者が本学で指導した3年間を通じた感覚として「継続して修士論文完成に取り組む」

姿勢が最も重要であるといえる。

「継続して」とは、プレ序論クラスにおける論文テーマの提出に始まり、序論・本論クラスやプレ結論・本論クラス、完成クラスと最後まで毎回論文ファイルを継続して更新し続ける行為を指す。実際に、入学時点では税法の知識が乏しい学生であっても、二年間継続して修士論文作成に取り組むことによって修士論文を完成させる知識を習得する事例が散見された。逆に、すでに科目を複数取得している学生であってもファイルの提出が滞り、欠席しがちな場合は期限内で修了できない事例もみられる。修士論文は主査を始めとした教員との密なやりとりによって完成するものであり、単独で完成させることは極めて困難である。現在本学に通う学生や、これから税法修士論文に取り組む人にとって、本研究から示唆された結果が有益であることを望む。

V. 課題と展望

本研究の限界として、第一にサンプル数の少なさが挙げられる。本研究で設定した測定項目をプレ序論クラスから完成クラスまですべて確認できるサンプル数は限られており、結果として60というサンプル数で分析を行った。ゆえに、t検定やカイ二乗検定などを用いた分析は用いずに、平均値の比較からの分析に留まった。今後、サンプル数の蓄積が行われることによって、より正確な分析が可能になると予想される。第二に、測定項目の精査が挙げられる。各段階（〇〇クラスなど）におけるファイル提出状況を、本研究では提出回数として取り扱っている。しかし、より正確なカリキュラムの有効性を測定するためには、提出されたファイルの進捗状況や取組状況を反映させる必要がある。具体的には、提出時期ごとに特定の学生をサンプルとして抽出し、実際にどのように取り組んでいたのかを確認する質的なアプローチも考えられ、今後の課題となる。

（参考文献）

堀籠俊材（2016年4月19日）MBA経営大学院強化文系救うか、朝日新聞、朝刊、東京本社、p.7
 沖津由紀（1996）修士課程で学ぶ社会人、日本教

育社会学会大会発表要旨集録、pp.246-247
 柳田雅明（1997）大学院ドクターコース社会人入学者へのカリキュラム対応—10 大学13研究

- 科での質問紙および聞き取りによる調査の分析を中心に一、カリキュラム研究 (6) pp. 113-124
- 高橋有紀, 直木詩帆 (2015 年 6 月 29 日) 社会人大学院、イノベーションとデザインが主流 2 年間 400 万円の人気講座に集まる人たち、週間アエラ、p. 23
- 山本宣明 (2011) 修士論文作成のマイルストーン管理 (その 1) — 1 年目の経過と課題 —, LEC 会計大学院紀要 (8) pp. 177-202
- 山本宣明 (2012) 税法修士論文の在り方 — 修士論文作成のマイルストーン管理 (その 2) に代えて —, LEC 会計大学院紀要 (10) pp. 197-220
- 岡部光明 (2012) 研究活動と研究論文 — 修士論文を中心に、国際学研究、(41) pp. 67-81
- 中央教育審議会、2012、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)」、12 (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm, 2015. 10. 29.)
- 堀一成, 坂尻彰宏 (2016) 阪大生のためのアカデミック・ライティング入門、大阪大学全学教育推進機構, 3 版
- 要弥由美, 吉里さち子 (2011) アカデミック・ライティング指導による言語表現の事前・事後テストにおける変化 — 全文検索システム『ひまわり』を用いた量的報告 —, リメディアル教育研究、6(2). pp. 72-81
- 宮崎文彦 (2013) アカデミック・ライティングにおける「自分の頭で考えること」の重要性 — スタディ・スキルとビジネス・スキル —, リメディアル教育研究、8 (2) . pp. 48-53
- トンプソン美恵子 (2016) 日本語による創作でアカデミック・スキルを磨く — 留学生科目「創作ライティングを学ぶ 5-6」の事例から —, 早稲田日本語教育学、(20) . pp. 151-155
- 中谷安男 (2015) 社会科学, 自然科学, 人文科学分野の国際ジャーナルにおける効果的なアカデミック・ライティングの検証、経済志林 83 (1) . pp. 39-59
- 渡邊淳子 (2015) 社会科学, 自然科学, 人文科学分野の国際ジャーナルにおける効果的なアカデミック・ライティングの検証、大学教育年報、18 pp. 19-26
- 薄井道正 (2015) 初年次アカデミック・ライティング科目における指導法とその効果 — パラグラフ・ライティングと論証を柱に —, 京都大学高等教育研究 (21) pp. 15-25
- 中東雅樹, 津田純子 (2016) 主体的な学びを促すアカデミック・ライティングの段階的指導法の開発、名古屋高等教育研究 (16) pp. 305-324
- 武谷慧悟, 渡寛法 (2015) オンデマンド型ライティング授業の改善に向けた授業評価分析 — 顧客満足分析の視点によるテキスト・マイニング —, 京都大学高等教育研究 (21) pp. 1-14